

守り、つないでいくべき和食文化には何をどこまで含めるべきか？

様々な意見から、和食文化の保護・継承の対象範囲を探ります。

和食文化は生きた文化であり、その保護・継承は、私たちが担い手となっていく必要があります。

検討会の議論では、和食文化の核となる要素と、その周辺にあつて時代や環境に応じて核となる要素を支える形で存在する要素を解き明かすとともに、これら両者の関係を分かりやすい形で示せるよう整理すべきとの指摘がありました。

そのためには、和食文化の保護・継承に取り組む理由や、誰が中心的な担い手となるかの整理が欠かせません。その上で、保護・継承すべき和食文化には何をどこまで含めるべきか探ってきました。

● 国民運動として和食文化を守り、つなぐ理由とはなんでしょうか？

和食文化を保護・継承する理由の背景には、和食文化が大きな曲がり角にきているという現状があります。和食文化の母国である日本の

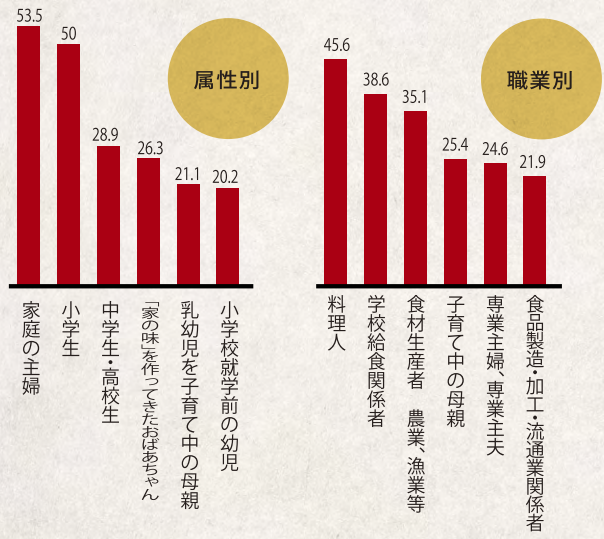
国民として、食材・技と知恵・作法などを次の世代へつなげ、世界に誇れる豊かな食文化を持つ国づくりに参画することは、ひとつの大きな目的になるのではないのでしょうか。また、この取り組みは、家族や地域の絆を強めることにもつながります。

実際にアンケートでも、「ふるさとや日本の良さを再認識し、日本人であることに誇りを持つことにつながると思う」、「受け継いできた味を、さらに次につなぐことで、家族や地域との結びつきを深めていくことにつながるのでは」など、日本人の精神的な部分に重きをおいた項目に票が集まりました。

● 誰が中心となって、和食文化を担っていくのでしょうか？

広く言えば日本人全体が和食文化の担い手ですが、家庭での担い手と、料理人などのプロの人は、分けて考えるべきとの意見がありました。アンケートや意見交換会では、家庭において

和食文化を守りつないでいく上で、中心となるのは？



は「食文化を子どもたちに伝える第一歩が家庭の食卓。母親の立場は重要だ」と思う「小学校の児童と家庭の主婦」をあげる声、「年配者である自分が、郷土料理や和食を作って食べさせて伝えたい」など、「子ども・親・祖父母の3世代」をあげる声が多く見られました。プロにおいては「料理人」が最も高く、子どもたちへの食育という視点からは、「学校給食関係者」をあげる声もありました。

どちらの場合も、小学生などの次世代を担う立場が、より重要視されているようです。

※ 和食会議アンケート調査より[n=114]